

## 林 幸治郎さん（ちんどん通信社リーダー）に聞く

聞き手：上方文化笑学センター長 広瀬 依子



※当センターでは、2025年度の学園祭に、大阪に拠点を置くちんどん通信社さんをお招きした。ちんどん屋さんは企業や店舗等の広告・宣伝を行うのが主体だが、現在ではイベント出演等も行う等、幅広い活動を練り広げている。今回の学園祭では楽器を演奏し、口上を述べながら練り歩きをしていた後、教室での公演&講演というプログラムだった。詳細はセンターの公式ホームページ内に掲載している「【報告】ちんどん通信社が学園祭に登場！（笑学センター主催）」を（2025年12月9日付）をご参照いただきたい。ちんどん通信社の設立者でありリーダーである林幸治郎さんに、ちんどん屋さんの役割や、活動への思いについてうかがった。

### さまざまな場所へ出向く

昨年お邪魔した学園祭での一番の感想は、大学の校舎がとても立派で、アメリカかどこか外国へ行ったような気持ちになりました。昔の時代からタイムスリップして未来社会に来

たような気もして、楽しかったですね。また、大学の外から来られた方も学べるように、いろんなことを企画されていて入りやすく、風通しがいいと思いました。

ちんどん通信社（企業名は有限会社東西屋）は、今でもやはり、宣伝の仕事が8～9割と大部分を占めます。それ以外はイベントやパーティーの余興等が多いのですが、宗教的儀式に呼んでいただくこともあるんですよ。たとえばお寺の法要等で、阿弥陀如来を背にしてちんどんを行うこともあります。考えてみれば、お坊さんがお経をあげたり祈りを捧げたり、巫女さんが行う神楽舞では鉦や太鼓が使われます。ちんどん屋もそれらの楽器を演奏しますから、違和感はないんですよ。

海外でも何度も演奏しています。西洋も東洋も、いろいろな地域へお邪魔しましたが、アジア圏では鉦や太鼓や銅鑼等に違和感がないようです。仏教で鉦などに触れる機会が多いからではないでしょうか。お寺の鉦がボンと鳴る。日本もそうですが、その余韻も心地よいという感覚をお持ちのように感じます。西洋でも教会の鐘が鳴りますが、しんみり、余韻にひたるというのは少し違う感覚を持っていらっしゃるようです。

また、初めの頃は西洋では英語で行おうと思っていたのですが、大勢の方々の前で話そうと思うと、なかなか通用しないんです。一対一だと何とか通じるのですが、大勢の前で声を発するには雄弁術みたいなものが必要なんですね。ただ、人間は誰しも童心を持っています。童心に訴えるようにすれば、年齢や言葉に関係なく通じるものです。

歌も言葉の意味ではなくて情念を伝える。今は、そういうふう心がけるようになりました。

## 歩き方の大切さ

合気道や生け花を習っているアメリカの青年がちんどん屋を経験してみたいというので、一日ちんどん教室をやったことがあります。そこで気づいたのですが、太鼓を叩く以前に歩き方が違うんですよ。合気道をやっているから、日本的な足の運びや身体の使い方は学んでいるのですが、それでも違う。僕たちが簡単にやっていることが案外できないんです。太鼓を担いで楽に歩くにはどうしたらよいか。昔、天秤棒をかついで物売って歩いていた人たちが、ぶらさげている品物を揺らさずに長時間歩けるのは、なぜなのか。アフリカ等では、頭の上に水の入った大きな壺や甕を載せて歩いていらっしやいますよね。でも、一定の歩き方をしているからこぼれません。それと同じようなことなのですが、なかなかできないんです。

歩き方のポイントは、人間は常に片足で立っていると意識することです。両足をついていても、実は右、左、右、左、と、一秒間に何十回と重心が移っているんですね。能の歩き方も、体重は常に片足に載っています。そして一瞬で体重移動する。お客さんにもわからないほどです。このように、常に一本足で立っているのだと思うことが大事です。それから、バランスにも気を配る必要があります。バランスを取ろうと思ったら足を地面にくっつけないといけない。僕も最初はわかりませんでした。経験を重ねるうちに、こういうことか、とわかるようになりました。

また、僕が習っていた日本舞踊の先生は、かなり動いても着物が乱れない。先生について踊っていたら、僕だけ着物がはだけるんです。また、雨の日に草履で出かけると、着物の裾の後ろに泥がはねてもしかたないのに、先生は、はねない。なぜだろうと、ずっと不思議に思っていました。聞いても教えてくださらないのですが、それは意地悪ではないんです。先生は子どもの頃からやっけていて体で覚えているため、できて当たり前で、どう説明していいかわからないとおっしゃるんですね。ですから、先生を見て真似しているうちに、だんだん謎がとけてくるんです。わかるまでに30～40年かかりました。

ほかにも例はあります。日本の女性が髪を洗って頭にタオルを巻きますよね。その時、昆布巻みたいに真っすぐにせず、斜めに巻いています。あの巻き方が日本の着物の着方なんです。でも、着付け教室等では、誰でも簡単にできるようにと、昆布巻みたいにしてしまう。能の方々も、どれだけ重ね着しても帯は一本だけで、これも斜めです。ちなみにインドのサリーもギリシャ彫刻も、布を斜めに巻き付けています。昆布巻きにするとミイラになってしまう。

このように、常に疑問を持つことが重要です。答はなかなか出てきませんが、ずっと頭の中に入れておくと、わかることがある。そうやってやっていると、発見があって楽しいですよ。

また、歩き方は時間の感覚にもつながります。たとえば、市場の宣伝で午前10時から午後4時までまわるとします。若い時はなかなか時間が経たない。まだ10時半か、4時までどうしよう、という感じです。ところが50代～70代ぐらいの方々、あっという間に1時間が経つ。というのは、歩き方を変えたら時間が変わるんです。セカセカ歩いている通行人の方々と同じ歩き方でやっていると、5分、10分がなかなか経たない。それが、歩き方や身体の保ち方をやっているだけで、ほかの人とは違う、ゆっくりした時間の流れを作れるんですね。

富山県で毎年開催されているチンドンコンクールには、いつも30組90人ぐらいのチンドン屋が来ています。そこで日本人的な伝統的な所作ができていない人がどれだけいるかといえば、実はほとんどいないんです。以前は、何らかの芸能関係にいた人たちがちんどん屋さんに入ってくるのが多かったのですが、今は違います。大学を出て行くところがない、ロックバンドや演劇をやっていたけど食べていけなくて、という場合が多い。何かの芸を持って来る人がいないんです。僕が入った頃は農村歌舞伎のご出身であったり、バンドマン、ダンサーなどいろいろな方がい

らっしゃいました。そういう方たちの立ち居振る舞いや芸を見て、古典芸能を見る目が開かれたんです。先ほどもお話しした通り、その時はなかなか身につかないかもしれません。でも、30～40年たって、先生はこういうことをおっしゃっていたのだなあ、とわかることがある。気が長いんですけど、その発見を若い人に伝えたいと思っています。

そして、われわれがいちばんやらないといけないのは、お客さんを惹きつけることです。若い頃は前のめりになり、お客さんを押しつけるようなことをやってしまいがちです。そうではなくて引き寄せようと思ってやっている、お客さんが話しかけてくださる。そして、人が集まってくる。これはなかなか辛抱がいらいます。

僕が若い時、大道芸人で舞踊家のギリヤーク尼ヶ崎さんに言われたことがあります。普通の芸人さんは寄席や劇場でお客さんが私語をしたりトイレに行ったりすると気になるものです。でも、ギリヤークさんは、その場で通行人が10人、20人と通り過ぎてでもいい。1分間に1人、立ち止まる人がいたらいい。もしかしたら、その人も5分経ったら立ち去るかもしれないけれど、気にせずに40分近くやっていると、テコでも動かないお客さんたちが50～60人になる。そのようにして全体に動かないお客さんを作ってから、決め技をするんです。昔の大道芸は皆そうなんですが、ギリヤークさんは本能的にされていましたね。

## 天下泰平を願って

僕の生まれ故郷である福岡・博多には、松囃子（まつばやし）という中世の芸能があります。いったん途絶えてまた復活していますが、謡曲で舞い、鼓と能管で演奏し、口上を述べる人もいます。今は大きなフェスティバルをやっていますが、もともとは家々を廻っていたんですね。そこに、ちんどん屋との関係を感じます。というのは、ちんどん屋がお店の宣伝でお邪魔する場合、以前はまず、そこでお神酒をもらったものなんです。開店する時にはいろいろな人からお酒をいただいて神棚に飾ります。そのお酒を神様が直接飲むことはできないから、お下がりとして僕たちがいただく。神様のかわりに僕たちが飲むというわけです。かつてはそういう感情を持っていたのだと思います。

最近、ちんどん太鼓の前の部分に「天下泰平」と書いた札を付けています。千秋万歳、天下泰平、万民法楽を望みながら、このまちを回っている、という意味です。スポンサーとしてご寄付をいただいた方々のお名前は、背中側に書きます。これにも意味があって、たとえば美容室の宣伝だとします。街を回っている時に別の美容室の前を通ると、そこの方は面白くないですね。ですから、私たちは天下泰平を願いながら街の厄を払っているんですよ、というかたちにするとやりやすくなるし、皆さんが喜んでくださいます。

また、見ている人は僕たちの出で立ちやパフォーマンスを見て、何らかの心の世界に入っているとも感じます。皆さんそれぞれの思いをどんどんふくらませていくのが僕たちの役割です。決して僕らの芸が上手ということではなく、存在だけで想念が生まれる。物理的な宣伝プラスいろんな思いがあるのです。

口上をお店の前で言うにしても、お店の人に成り代わって、天に向かって宣言するんです。この店は公明正大でお客様の前で一所懸命やります、と言うと、神に対する宣言になる。すると依頼主さんは、これでこの店は大丈夫、繁昌する、とお思いになります。誰もいない場所でも同じようにします。というのは、僕自身が、アパートで寝ていた時に聞こえてきたちんどん屋の演奏に興味をもってこの世界に入ったからです。そのちんどん屋さんには僕の姿は見えていない。だから、見えているだけがお客さんではない。常に劇場の舞台に立っているようなつもりでやらないといけません。ビルの中で働いている人に、ちらっとでも音が聞こえるように。誰もいないから適当でいい、ということではありません。

## 素朴な思い

芸能は、歴史をさかのぼるとほとんど御祈祷と融合されています。芸能者は、あの世と交流してくれる。お医者さんでは治してもらえないことを治してくれるかもしれない。皆さんはそう思って、厄払いをしてもらうわけです。天神祭でも、なぜあんなに暑い時に人が集まるのか。そこに賑わいがあるからです。賑わっているところに神様が下りてくるといふ民間信仰のようなものが感じられる。賑わっているところに行くと神様と交流できるのではないかという信仰があり、僕たちが賑やかに歌舞音曲をやっていると福の神が下りてくる。そういう素朴な思いが、皆さんの中にあるのではないのでしょうか。その思いにのっとなって、僕たちはちんどん屋を行っています。また、受け取る方が自分でふくらませて下さるんですよ。たとえば仏壇の前とか、大きな災害のあった場所で演奏することがあります。依頼して下さる方々にとっては、亡くなった方々が見えている。若い時にはわかりませんでしたが、年齢とともにわかるようになりました。

また、年齢を重ねると、いろんなことから自由になると思いますので、冒頭にもお話したように、これからは、過去から未来へやってきた人のように、今の風物を楽しみたいですね。そして、一緒に仕事をしている30代の娘が継承できるようになればと思っています。私には孫もいるのですが、幼稚園の卒園式で将来何になりたいか、という発表が行われた時に「チンドン屋になります」と話したんです。会場中が大爆笑でしたね。幼いですからそのうち言わなくなるかもしれませんが、今はよかったと思っています。

ちんどん業界全体としては、近年、若い人は増えてはいないので、若い人に来てもらえるように、また、一般の人が気楽に来て一緒に勉強できるようなら場所を作れたらと考えています。さらに、活動を通して、若い人がちんどんだけではなく、あらゆる古典芸能に目を開いてくれれば嬉しいですね。だまだ発見することはいっぱいあると思いますので、悪戦苦闘しながら過ごそうと思っています。